

災害研およびリーディング大学所属学生がハワイ、ヒロ津波被災地域および太平洋津波博物館を訪問しました（2016/9/14）

テーマ：世界津波の日、災害アーカイブ、Communicating Disaster Science
場所：米国ハワイ州ヒロ

2016年9月24日、東北大学災害科学国際研究所およびリーディング大学院グローバル安全学トップリーダー育成プログラム（以下、G-Safety）所属の5名の学生が、G-Safetyプログラム研修科目 Convergence-Laboratory および9月16日より開催される世界津波の日イベント「Communicating Disaster Science」の一環として、米国ハワイ州ヒロにて津波復興地フィールドワークを実施しました。本企画は災害科学国際研究所所属教員の川島 秀一教授、マリ エリザベス助教（以上、人間・社会対応研究部門）および、杉安 和也助教（リーディング大学院）が担当し、津波常襲地であるハワイにおいて、どのように災害史を文章化し、またその知見を伝承していくのかを調査することを目的として、実施されました。一行はハワイ州ヒロにある太平洋津波博物館を訪問し、その館長であるマリーン マーレイ氏、および博物館員のバーバラマフラー氏より同博物館での展示物に関する解説を受け、特にヒロに甚大な被害をもたらした1946年アリリューシャン津波および1960年チリ津波に関する発生要因、避難行動、そして津波からの生存者らの物語と経験、さらにはこれらの情報をどのように保存し、広めているのか、詳細な講習を行っていただきました。本講習ののち、一行はハワイの2つの津波の経験者であるケン氏と共に、ヒロ内の津波被災地の巡検を行いました。この巡検ののち、5名の学生は一連の調査結果を世界津波の日イベント「Communicating Disaster Science」において発表しました。



太平洋津波博物館員バーバラ氏および参加者一同



ヒロにおける既往津波の展示



博物館内での見学の様子



津波生存者であるケン氏による解説

文責：マリ エリザベス（人間・社会対応研究部門）、杉安 和也（リーディング大学院）